View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

北海道科学大学研究紀要
第41号(平成28年)
研究報告

Bulletin of Hokkaido University
of Science, No.41(2016)
Research Reports

北海道科学大学が提供する地域子育て支援活動

A new support activity for child care of local residents: An endeavor of the Hokkaido University of Science

笹尾　あゆみ*　山本　八千代*　前田　尚美*　草野　知美*
伊織　光恵*　市川　正人*　小池　伝一*　須藤　桃代*
関口史絵*　福原朗子**　三田村保***

Abstract

We started a new child care support project for local residents which based on our university (Hokkaido University of Science) and performed a new child care support program in order to reduce the mental stress and to improve the quality of life (QOL) of mothers. In order to assess this new child care support program, we studied about the mother's way to thinking on child care, the support contents which mothers requested, and the degree of satisfaction with this new support program. The results of the present study showed that the importance of a child care support program which based on the university. The results from the present study also suggest that the need for new child care support program which based on mother's request, the change of the seasons, and local customs.

1. はじめに

近年、少子化問題がクローズアップされ、子育てを楽しめない、子育てにストレスを感じる、子育てに困難感を感じる親の存在が明らかになってきた。

内閣府の子育ての楽しさ、辛さについての世論調査報告書[(1)]によると、子育てが「辛い」と感じる人は４割（41.1%）である。その内容は「子どもの将来の教育にお金がかかること」42.4%、「子どもが小さいときの子育てにお金がかかること」22.2%であり経済的負担が首位を占める。しかし、「自分の自由な時間がなくなること」、「子どもの相手は体力や根気がいること」、「子どもにどのように接すればよいか分からないこと」、「住居が手狭になり住まいにゆとりが持てないこと」、「子どもを連れて外出するのが大変なこと」、「子ども自体を好きではないこと」などが回答され、育児支援ニーズが高いことが示されている。

そこで、親が感じる育児不安や育児困難感の軽減を図るためのアプローチが市町村、保健医療機関や、幼児教育、保健医療の学科を開設する大学等おいてすすめられるようになった。育児不安や育児困難感の軽減を図るアプローチは、行政や児童福祉に限らず、母性看護学や小児看護学領域においても課題とされるようになっている。

そこで小児看護学、母性看護学教員が中心となり、子育てを行う親や家族のストレス解消、Quality of Life(以下 QOL と記述)の向上、児童虐待の防止を目標とし、「HUS 子育て支援カフェ」立ち上げ、育児支援プログラムを実施した。これまで実施した内容と参加者へのアンケートの結果を報告する。

2. 方法

対象者は大学近隣及び周辺市町村に居住する未就園の子どもとその養育者とした。

運営は平日の午前中月に 1～2 回、1 回 1 時間半～2 時間程度、本大学の母性・小児看護学実習室、実験室または手稲区民センター会議室で実施することとした。

スタッフの構成メンバーは大学教員（母性看護学教員、小児看護学教員、基礎看護学教員、精神看護学教員、都市環境学科教員）、保育士、学生ボランティアで構成した。

プログラムの内容は、①参加者が楽しむことができる②参加者の疲労が軽減される③参加者の子育てに対する意欲が高まる④教員、参加者との

＊北海道科学大学保健医療学部看護学科
＊＊北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科
＊＊＊北海道科学大学工学部都市環境学科

交流ができるものとし、子育てのための勉強や講演会、ストレスの解消のための軽い運動、親子で楽しむプログラムなどを計画した。プログラムをゆっくりと楽しむことができるように養育者のみのプログラムの時には保育士が託児を行うこととした。

参加者の募集は大学のホームページやポスターの掲示およびチラシの配布に加えてSocial Networking Service（以下SNSとする）に告知し、参加者との連絡はメールで行うこととした。

3.活動概要

実施期間は平成26年7月から平成28年3月までの約1年8ヶ月間、通算20回実施した。

プログラムの参加者は延べ270人だった(表1)。その内訳は養育者124人、子ども146人だった。参加した養育者はすべて母親だった。参加した子どもを年齢別にみると2歳が32.9%、次いで1歳が29.5%であった。

参加したきっかけは友人からの紹介が36.8%、SNSが31.6%だった（表2)。

子育て支援カフェの利用回数について、「2回以上」が45%以上で、その内「4回以上」が約17.8%であった。

プログラムの内容は入浴剤づくり、骨盤底筋体操、肩こり体操、みんなで語ろう子育ての話などであった。また学外講師によるものは講演会「からだの科学わが子にどう伝えますか」、料理教室「Let's Cooking〝クリスマスメニュー“」、「アレルギー対応のスィーツ教室ー牛乳、小麦粉、卵を使わないかぼちゃ蒸しパンとココアケーキを作りましょうー」であった。子どもの健康に関するプログラム内容は「とっさのときの子どもの対応」として発熱・下痢・けいれんなどの症状が出た時の対応や子どもが起こしやすい事故の状況を参加者と一緒に考える「子どもに安全をプレゼントしてみませんか」を開催した。これらのプログラム開催時は、保育士が子どもの世話を行い、母親のための時間を確保した。

親子で一緒に楽しむプログラムとして学外講師によるリトミック「体でリズムを感じよう！」「親子 de あ・そ・ぼ！@HUS」を5回開催した。また学生が企画運営した夏祭りを実施した。

その他に乳幼児から高校生までの発達に不安のある子どもおよび保護者の方を対象に体を動かしストレス発散することを目的とした「お子様の感性を育むー良い音、良いリズム、音があふれる、音が響くー音楽を中心とした感性を育む」を開催した。

大学祭では栄養士による食育相談、休憩場所の提供、助産師による子育て相談を行った。また親子連れをはじめあらゆる年齢層が通行する札幌駅前通地下歩行空間(チカホ)や手稲駅広場において、SIDS(乳幼児突然死症候群)や児童虐待、デートDV、薬物乱用等についての知識啓蒙活動および「HUS子育て支援カフェ」の広報を行うことを目的に「子育て支援フェスティバル」を開催した。

表1 HUS子育て支援カフェ 年度別活動実績

	活動回数（回）	参加人数（人）	養育者（人）	参加した子どもの数						
				総数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	その他
平成26年度	6	97	41	56	17	15	14	7	3	0
平成27年度	10	173	83	90	12	28	34	9	2	5
合計	16	270	124	146	29	43	48	16	5	5
%				19.9	29.5	29.5	32.9	11.0	3.4	3.4

表2 子育て支援カフェに参加したきっかけ

	チラシ	友人	SNS	その他
平成26年度	10	15	6	10
平成27年度	15	28	31	2
合計	25	43	37	12
%	21.4	36.8	31.6	10.2

4. プログラムの評価

プログラムの評価として養育者へ初回の参加時に無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は「参加した理由」、「内容の満足度」などで構成した。倫理的配慮として目的・意義、方法、自由意思に基づく協力、無記名回答、 プライバシー保護などについて依頼文にて説明し同意を得た。北海道科学大学研究倫理審査委員会の承認を受けて行った。質問紙の回答が得られた 45 人を分析対象とした。

1) 結果

(1)対象者の概要(表 3)

年齢は 30 歳代が 45 人（75.6%）で最も多く、20 歳代は 9 人（20.0%）、40 歳代は 2 人（4.4%）であった。子どもの数は 1 人が 27 人(60.0%)、次いで 2 人が 12 人(26.7%)、3 人が 4 名(8.9%)だった。仕事の有無は無職が 31 人(68.6%)であった。相談者の有無はありが 40 人(88.9%)、なしが 5 人(11.1%)であった。

(2) 子育て支援カフェに参加した理由

子育て支援カフェに参加した理由で最も多かったのは「子どもと二人で過ごすことが多い」、次いで「友達に誘われた」、「子育て親子との交流」、「子どもについての知識・技術の習得」の順だった。

(3)開催時間について

よいが42人(93.3%)、遅い時間がよいは3人(6.7%)であった。

(4)プログラムの満足度

プログラム内容は 90%以上が満足していた。「今後も参加したいと思うか」の問いには「思う」が 100%だった。

(5)子育て支援に対する自由記載

「いつも親子同じ時間を過ごすので、今回のように親子別々の時間が取れると子どもも成長できて私も気が楽でありがたいです。」、「毎日３人の育児で余裕がない生活ですが、無理をしてでも、このような自分だけの時間を持つことは大切だなと思います。もっとこのような講座が増えて欲しいなと思います。」、「毎日外には出るのですが同じことの繰り返しなので刺激が少ないかなー？と思っています。特に上がもうすぐ４歳で幼稚園も行ってないので、こういう場はとてもありがたいです。」、「初めての子育てなのでわからない事だらけなので、色んなセミナーや行事に参加し、他のお母さんのお話等を聞くことで参考になることが多いのでとても役に立っています。他のかたとお話することでリフレッシュにもなります。」、「車で来れるのでよかったです。すごく楽しかったです。子どもの人数などもちょうどよく、色々と目を配って頂き、ありがとうございました。」などの感想があった。

表3 母親の背景 n = 45

項目	カテゴリー	人数	%
年齢(歳)	20代	9	20.0
	30代	34	75.6
	40代	2	4.4
子どもの数	1人	27	60.0
	2人	12	26.7
	3人	4	8.9
	4人	1	2.2
	なし(妊娠中)	1	2.2
仕事の有無	フルタイム(育休中)	9	20.0
	パート	2	4.4
	無職	31	68.9
	無回答	3	6.6
相談者の有無	いる	40	88.9
	いない	5	11.1

図1 入浴剤づくり

図2 リトミック体操

5.考察

2 年間の子育て支援カフェの活動実績から、参加数は毎回 10 組前後あり、乳幼児を抱える養護者に子育て支援サービスの需要が高いことが示唆された。

子育て支援カフェに参加したきっかけは「友人からの紹介」が 35%以上あり口コミで広がっている。また 2 年目には「SNS」が友人からの紹介より多くなっており、子育て支援カフェの情報について定期的にチェックしていることが推察される。子育て支援カフェの利用回数（図１）について、「2 回以上」が 45%以上で、その内「4 回以上」が約 17.8%とリピーターが多い。子育て支援カフェは毎回新規参加者が 5 割程度あり、口コミ以外に学外での活動が本学の子育て支援カフェの認知度を広めることにつながった可能性も考えられる。

プログラム内容に関しては 90%以上が満足していた。参加者の意見を取り入れながらプログラムを企画したことが満足に繋がったと考える。また内容だけでなく、母親にとって家から出て外出をする機会や子どもと離れる機会を持つことが母親の満足感につながっている[(2)]と考える 。参加者の「自分だけの時間を持つことが大切」、「いつも親子同じ時間を過ごすので、今回のように親子別々の時間が取れると子どもも成長できる」という意見からも子育てをする母親は、一人になれる時間がないことに強くストレスを感じており、子育て支援事業に参加することが、孤立してしまいがちな環境から抜け出せることにつながっている[(3)]。

大学近郊の地域は、寒冷積雪時期の生活状況は厳しく、子育て親子の育児支援ニーズは高いと考える。生活様式が屋内に閉じこもりがちになり、外遊びができず他児との交流が減ることが推察される。屋内中心の生活は、親の孤立感を高める。また、運動不足からストレスを感じる人も多くなると思われる。子ども虐待や育児不安の最大要因は、親の孤立感、ストレスであるが、今後も継続して積雪の多い寒冷地域の自然環境、住環境を踏まえたプログラムを提供していく必要がある。

謝辞

この事業に携わってくださった保育士・本学の教員と職員、外部講師の皆様に深謝いたします。

参考文献

(1) 内閣府大臣官房政府広報室, 世論調査報告書, 2007.

(2) 大住 裕子, 野田 茉里奈, 奥野 未奈他, 0~3 歳の子を持つ母親の子育て支援への満足感と求める支援, 香川母性衛生学会誌, 11(1), 2011,pp50-57

(3)野口純子, 船越和代, 大池秋枝他, 子育て支援センターを利用している母親の育児ストレス, 香川母性衛生学会誌, 7(1), 2007, pp40-45.

(4) 大林陽子, 岡田由香, 緒方京他, 大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価, 愛知県立大学看護学部紀要, 17, 2011, pp33−39,